

『高瀬舟』

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引き比べて見た。喜助は為事をして給料を取っても右から左へ人手に渡して亡くしてしまうと云った。いかにも哀な、気の毒な境界である。しかし一転して我身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貫う扶持米を、右から左へ人手に渡して暮しているに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂わば十露盤の桁が違っているだけで、喜助の難有がる二百文に相当する貯蓄だに、こっちはないのである。

さて桁を違えて考えて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいるのに無理はない。その心持はこっちから察して違えることが出来る。しかしいかに桁を違えて考えて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で為事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさえすれば、骨を惜まずに働いて、ようよう口の糊のりすることの出来るだけで満足した。そこで牢に入ってから、今まで得難かった食が、殆ど天から授けられるように、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えて見ても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。